



ストーリーとしての 研究開発

総務理事 森川博之

「技術」が前面に出てくる場面が減りつつある。研究開発プログラムの名称にしても、役所の会議の名称にしても、技術を明示することが以前に比べて少なくなりつつある。総務省においても、「生活資源対策会議」「街づくり推進会議」「超高齢社会構想会議」などといった名称の会議が登場している。ICTには新しい技術を産み出すフェーズと、ICTを社会に浸透させるフェーズの二つのフェーズがあるが、後者のフェーズに入りつつあることを示唆しているのではないだろうか。

ICTを社会に浸透させるフェーズにおいては、課題を明らかにしてから技術課題に落とし込むトップダウン型の研究開発が必要となる。ICT分野においても「デザイン」「スマート」「社会課題」などの言葉が多用され始めているが、以前からこれらの言葉を用いてきた土木や機械などの分野においてトップダウン型の研究開発が推奨されているのと同じである。

トップダウン型の研究開発において求められるのが「ストーリー」であろう。どのように (how) 実現するのかではなく、何を (what) 行うのかにより重さが置かれるため、なぜこの研究開発を行わなければならないのか、この研究開発における課題は何か、この研究開発で誰にどのような価値を提供するのか、といったことを語る必要がある。

そもそも、ICTは現代における汎用技術 (General Purpose Technology) であり、世の中を一変させることのできる技術である。特定の生産物に関連する技術ではなく、様々な経済活動において利用され、非常に広い関連分野を擁する技術だ。高速ブロードバンドは広く普及し、情報通信を介した社会活動が広く行われるようになってきているものの、社会が変わっていくプロセスの中でまだまだ初期的な段階にいるにすぎない。環境、都市、農業、資源、流通、土木、医療、教育などのそれぞれの産業を抜本的に変革し、産業構造、経済構造、社会構造までも大きく変える力をICTは有している。

このためには、何をするかを研究者や技術者自身が見いだしていく必要がある。Howを突き詰めることに加えてwhatを探すことも、研究者や技術者の職務となる。ICTの研究者が、都市、土木、農業、医療などの他の事業領域にまで踏み込み、新たな洞察や知恵を見いだしながら新しい社会をデザインしていくことも必要だろう。

社会の大きな流れの中で沈黙考して、素晴らしいストーリーを創り出し、新しい産業と社会制度の確立に寄与する「ストーリーとしての研究開発」を推進するために、本会の果たすべき役割は大きい。一橋大学楠木健教授の書籍「ストーリーとしての競争戦略」のメッセージを一言で言うと「優れた戦略とは思わず人に話したくなるようなストーリーであるべきだ」となるが、戦略も研究開発も同じである。思わず人に話したくなるようなストーリーが集まる場を、本会が提供できれば素晴らしい。

「客に幾ら尋ねても、自動車が欲しいという答えは返ってこない。なぜなら客は馬車しか知らないからだ」とは、ヘンリー・フォードの言葉である。未来を予測することは難しいが、未来を創ることはできる。変わりつつある時代の中で、10年、20年、50年後を強い思いで夢見ながら、産業、経済、社会が変わるプロセスに本会が寄与していきたいものである。